

はじめに

本書は、2018年度より2020年度まで日本学術振興会科学研究費助成事業の支援を得て推進した基盤研究(B)「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮したCEFR能力記述方法の開発研究」(Research and Development of CEFR Proficiency Description Methods with special consideration for linguistic types and socio-cultural diversity of Asian Languages) (研究代表者富盛伸夫、研究課題/領域番号18H00686)の当初2年間に得られた研究成果の一部を報告書として公開するものです。

本課題研究では、EUの言語教育改革の中核をなすCEFR(Common European Framework of Reference for Languages「ヨーロッパ共通言語参照枠組み」)が2001年に公表されて以来、その受容が現在では欧州圏内から世界の言語教育機関に拡がりつつある状況を踏まえ、「非EU諸語」への適用には多様な言語類型・社会・文化的背景を考慮した適切な運用が必要となるのではないかと、という問題意識から出発しています。本研究プロジェクトは、東京外国語大学語学研究所を拠点にして遂行した先行する基礎的研究の上になるものです。まず、2006年度より基盤研究(B)「拡大EU諸国における外国語教育政策とその実効性に関する総合的研究」(3年間、代表者富盛伸夫)および、続く2009年度より基盤研究(B)「EUおよび日本の高等教育機関における外国語教育政策と言語能力評価システムの総合的研究」(3年間、代表者富盛伸夫)では、EU参加各国での現地調査をとおして、その理念と実施面での整合性などを調査しました。この問題意識を継承し対象の展開をはかった研究、2012年度より基盤研究(B)「アジア諸語を主たる対象にした言語教育法と通言語的学習達成度評価法の総合的研究」(3年間、代表者富盛伸夫)では、アジア諸国へのCEFRの浸透度と通言語的枠組みの有効性を考察しました。直近の3年間、2015年度より2017年度まで推進した基盤研究(B)「アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究」(代表者富盛伸夫)では、多くのアジア諸語教育の専門家の協力を得て、アジア諸地域にそれぞれ特有な社会・文化的特性を重視した言語コミュニケーション能力の測定方法について考察しました。(先行する科学研究費研究プロジェクトの活動内容については、本中間報告書が掲載されている東京外国語大学語学研究所のサイトにリンク(<http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/site0008/index.html>)されているのであわせてご覧いただければ幸いです。

折しも2018年2月にはEUはCEFR, *Companion Volume with New Descriptors*として2001年版CEFRの改訂・追補版を提示し、多様な社会文化的背景を前提とする新たな方向性を取りつつあります。本科研プロジェクトの問題意識はまさにそれと軌を一にしており、これまでの研究成果を引き継ぎつつ、特にアジア諸地域に適用しうる異文化間言語コミュニケーション能力測定方法の開発と展開し、また教育現場への還元を試みるものであります。当初の2年間の研究活動は研究分担者、研究協力者、また、国内外からの講演者など多彩な参加者のおかげもあり、ほぼ順調に遂行できていることを報告するとともにご協力に感謝いたします。

最後に、研究拠点として多大な便宜を図っていただいた東京外国語大学語学研究所と、研究補助や本中間報告書の編集作業に尽力していただいた東京外国語大学語学研究所事務補佐の深尾啓子さん、東京大学のYI Yeong-ilさんに深く御礼申し上げます。

2020年3月

研究代表者 富盛伸夫(東京外国語大学)